

## 特集号に寄せて 昭和天皇の時代

伊藤 隆

編纂された『昭和天皇実録』が公開された。全部を読んだわけではないが、かなり新しいものをも含め多くの史料を蒐集し、それに基づいた叙述を行っている。編纂関係者の努力に敬意を表する。しかし、残念ながら『明治天皇紀』と比較して、それに並ぶものとは言えないというのが率直な感想である。

気になった一つは、占領期の記述である。天皇のマッカーサーとの会見録が第一回以外アプルーチ出来なかつたのは何と言つても残念である。また日本が連合国（米軍）軍事占領下の時代は天皇もGHQの支配下にあつたのだが、その気配が余り感じられない。天皇の行動に関して、どのようにGHQ側との接触が行われたのか。ご巡幸・所謂「人間宣言」についても、GHQとの折衝をもう少しきちんと記述する必要があつたのではないか。

昭和天皇が摂政になられ、即位され、崩御されるまでの七十年弱の期間は、日本近代の中でも最も波瀾に満ちた時代であつた。第一次大戦後・昭和初期の不景気から急速な経済の発展が見られ、その先に昭和十五年のアジアで最初のオリンピックが見据えられていた。同時に次第に衰退したとはいえ、自由な雰囲気、欧米からの新文化の流入が見られた。それとまた同時に大陸の権益保持をめぐる中国との対立が戦乱に至り拡大し、併行して西太平洋の覇権をめぐる米國と

の対立の激化、それらの結末としての大東亜戦争が勃発した。この国民全体が参加した戦争は、無念にも敗戦という結果に終わった。多くの内外の犠牲を払って。その後七年間の軍事占領に耐え、苦難を乗り越えて経済再建、更に高度成長をなし、遂に世界第二の経済大国を達成した。この七十余年はまた、ソ連中心の世界共産主義勢力の勃興から没落の時期にほぼ重なるのである。ほぼ上昇気運にあった明治期と大きく異なる時期の昭和天皇一代記を編纂するのは実に困難な課題であったと言えよう。これを中間出发点にして、昭和期の日本をきちんと描くことは歴史学者の仕事である。

占領軍による日本近代史の書き替え、所謂「東京裁判史観」の克服も大きな課題である。「慰安婦」問題、南京「虐殺」事件等の捏造もその延長線上にあり、この史観の克服なしには解決出来ない。その気運の醸成に本会も役割を果たさなければならぬ。

ところで昭和史を考えるためにも、一万数千年前に縄文文化を生み出し、以後今日に至るまで、この国土に一貫して文化を育み育ててきた、私たちの祖先の歩みを深く認識する事が重要であろう。同一の地に同じ民が歴史を紡いで来たというのは世界に稀有な事である。無論世界から孤立していたわけではなく、縄文文化の基礎の上に古くから大陸の文化を吸収し、織豊時代に南蛮文化を消化し、幕末以来欧米文化も大幅に取り入れ、しかも古来の伝統を失わなかった。万葉集に纏められた和歌文化を今日も多く日本人が楽しんでいるのである。そして、世界最古の君主、万世一系の天皇は我等日本人の象徴なのである。

(東京大学名誉教授・本会理事)